

呪師は、法会の際に魔障の侵入するのを防ぎ、護法善神を勧請するなどして、法会を円満に成就させるために修法を行う事を職務とする。呪師は、「水取り」を行い、「走り」、「達陀」を宰領し、結願の際に行われる作法である「灌頂護摩」、結願の「神供」等、神道的・密教的諸作法も、呪師が勤める。

死者と協同する仏教は可能か

坂井 祐円

日本仏教の霊的次元における社会貢献を考える上で、葬式仏教の問題は無視することができない。とはいえ、葬式仏教はこれまで、仏教の頹落した形であるとされ、とかく厳しい批判に曝されてきたのも確かである。

葬式仏教への批判は、仏教が葬式に関わることは是非を問うよりも、関わる意味が明確ではないことに向けられるべきであろう。葬式に関わらないのが本来の仏教だ、という論法では、依然として、教理としての仏教（理念）と習俗としての仏教（社会的現実）との溝は埋まらない。むしろ、仏教が葬式に関わる根拠を、仏教の思想構造の中に見出し、葬式を仏教的にどう意味づけるかを課題としなければならない。

その際、一つの示唆を与えてくれるのが、京都学派の田辺元が提示した「死者との実存協同」の思想である。「実存協同」とは、絶対無が愛となって、実存的主体を生きる人間にはたらしき、その人間を媒介として、他の人間に対して覚醒のリレーシ

ョンを起こすことを指す。この覚醒のリレーションが、死者と生者との間に起こるとするのが、「死者との実存協同」である。それは次のような展開をもつ。絶対無即愛のはたらきが死者を媒介にして、生者へと振り向けられることで、生者に覚醒がもたらされ、さらに、覚醒した生者は、今度は自身が媒介となって絶対無即愛のはたらきを他者に振り向けていく。

「死者との実存協同」は、日本仏教のコンテキストに即して言えば、死者によって生者が回向供養される、という構図を表していることになる。これは、死者に向けて回向供養する、という従来の日本仏教が捉えてきた死者供養の構図とは、対照的である。

日本仏教の死者供養には、死者を安楽にさせる、成仏させる、という大義名分があった。それは、迷いの中にある死者を、仏の世界と結びつける、という意味をもっていたわけであるが、その内実は、遺された生者が漠然と抱く死者に対する畏怖や脅威を解消するために、回向供養の考え方が利用されてきたとも言える。つまり、死者に向けられた供養というのは、生死を超えるという仏教本来の課題を死者の側に明け渡してしまうために、遺された生者に内省を促していく力を弱めてしまいう、という問題点を抱えているのである。

死者によって生者が回向供養されるという構図には、この問題を克服して、死者の供養を通して生者の覚醒がもたらされる、という根本転換がはかられているのである。

とはいえ、一方で、この構図は、生者への焦点化が強調されるために、結局は、死別悲嘆を癒すグリーフケアの考え方を死

者供養に導入しているだけではないか、という批判も成り立つ。グリーフケアには死者の再配置という考え方があり、死者と共に生きることによって生きる力を回復させる、という視座が確かにある。しかし、グリーフケアと死者からの回向供養との根本的な差異は、死者の位置づけである。グリーフケアの場合、死者は生者の世界を引きずっているが、死者からの回向供養においては、死者は礼拝と尊敬の対象であり、仏の世界からの慈悲のはたらきなのである。

葬式や法要は、死者と濃密に関わる場であり、死者と生者が協同する場である。それは死者を供養するという形をとりながら、実際には、死者によって生者が供養されている場である。そのことの意義を確認することによって、死者供養の捉え方は大きく転換するであろう。とりわけ僧侶にとっては、死者を礼拝と尊敬の対象とすることで、死者が仏の世界からの慈悲のはたらきとなること、それゆえに、遺された生者が死者と向き合うことで、仏の世界へと導かれる契機となることを自覚しつつ、葬式や法要に臨むことが大切ではないか。この辺りに、死者と協同する仏教が開かれる可能性があると思うのである。

仏教看護のめざすもの

藤 腹 明 子

「仏教看護」を標榜する看護者の立場から、仏教看護のめざしているものが、宗教の社会貢献、対象の霊的側面のケアに何

らかの意味をもつものであることについて述べたい。

一 看護と宗教

看護を実践するうえで、宗教に関することを視野に入れる必要性がある理由については、次の五点を挙げたい。それは看護が、人間が人間にかかわる仕事であるということ、人間の「生老病死」という生命(いのち)の営みにかかわる仕事であるということ、人間の誕生前から死後までも視野に入れた仕事であるということ、科学や人間の力では解決できないこともあり得る仕事であるということ、癒しや救いにかかわる事が問われる場合があり得る仕事であるということ、等である。看護を実践するうえで、時には、科学では解決できない事がらへの対応が求められるという点において、看護における宗教的視座は大切である。

二 臨床現場におけるスピリチュアルな側面の問題

医療現場では、末期患者やその家族の体験する苦しみを「身体的」「精神的」「社会的」「スピリチュアル」の四つの側面からとらえ、ケアをしていこうとするのが一般的である。現場におけるスピリチュアルな事がら、疑問、苦しみについては、次の六項目にまとめることができる。つまり、この世に生を受け、存在することの意味に関すること、生きる意味・目的・価値に関すること、病気体験・苦難の意味に関すること、死や死後、来世に対する不安・恐怖に関すること、宗教的疑問、罪の意識に関すること、生まれ変わりへの関心・期待に関すること、等である。看護が、患者や病人、その家族のこのような事がらについての疑問や苦しみに対峙し、対象自らがその答えを